
はじめに

肝疾患は、現代社会における深刻な健康問題になっています。肝臓は、代謝物の合成や解毒、胆汁の生成など、さまざまな生理学的プロセスを担っており、その機能が低下することで人体に深刻な影響を及ぼします。そのため、肝臓の状態を適切に評価し、早期に病態を把握することが重要です。本書「肝疾患 臨床検査でどう迫る？」は、特に肝臓の臨床検査に焦点を当て、最新の知見と実践的なアプローチを提供することを目的として企画致しました。

肝疾患の診療にかかわる医療従事者にとって、正確で包括的な臨床検査情報の理解は、意思決定の基盤となる重要な要素ですが、肝臓の機能や構造の複雑さ、病状の多様性から、病体にかかわる臨床検査の解釈は医療従事者にとって難題となっています。

本書は、肝臓の生理学的な役割や構造、肝疾患の病因と診断、生理検査や病理学的検査、遺伝子を含む最新の検査や技術のアップデートなど、幅広いトピックについて各分野を代表する専門の先生方にご執筆をいただきました。読者の皆さまが実際の診療で役立てることができるよう、臨床の現場で遭遇する病態や検査の進め方などにつき実践的な観点からご解説いただき、また肝臓にかかわるさまざまな検査は、疾患の診断のみならず肝癌などの治療効果や予後の予測にも用いられていますので、疾患の診断以外を目的とした臨床検査の応用についても取り上げていただきました。それぞれの専門領域での深い知識を惜しみなく提供してくださった筆者の先生方のおかげで、本書は臨床現場において有用な多くの情報を掲載することができました。心から感謝申し上げます。

今後の診療に当たり、本書が読者の皆さまの、臨床検査を通じた肝病態へのより深い理解を得るための一助になりましたら幸いです。

最後に、本書は多くの方々のご尽力とご支援を得て、出版に至ることができました。携わってくださった全ての方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

佐藤雅哉(東京大学医学部附属病院 検査部)
